

9月16日（火）「5年6年 被爆伝承講話を聴きました」

9月16日（火） 5年6年 被爆伝承者の方のお話をお聴きしました

被爆伝承者の菅さんが、広島からお越しくださり、「母さんをたのんだぞ!」というお話をしてくださいました。広島で被爆された、瀬越さんという方が、残されたお話です。

主人公は、東京から広島へ住むことになった、睦彦さんという5年生の男の子のお話です。食べるものもなく、東京や大阪など大都市がどんどん空襲に合い、生活もだんだんと苦しくなってきます。

やがて、空襲が激しくなることをおそれて、広島市内から、広島の北東に、集団疎開に行くことになりました。親元を離れて疎開先で過ごす辛い様子も話されました。疎開先から広島市内の病院に行くことになった睦彦さんは、実家に戻ることになりました。そして、8月6日に、原爆が、投下されました。原爆が落ちたときの様子を、まるで、今、落ちたかのように話される菅さんのお話に、子どもたちは、真剣に聴きいていました。原爆を投下されたまちや人々の様子を聴くことで、戦争の悲惨さ、むごさをひしひしと感じました。

ユネスコ憲章では、「戦争は人の心の中でうまれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」と話されて締めくくられました。

子どもたちは、感想で、「原爆はとても悲惨なことだと思いました。」「修学旅行で平和資料館にも行きます。考えることがたくさんあるので、しっかり勉強しなければと思いました。」「体験したことはないけれど、どれだけ恐ろしいものかわかりました。」「たくさんの人が戦争で亡くなり、悲しい思いをするのに、戦争をなぜするのだろうと思いました。」と、述べていました。また、「半径500メートルの死亡率99.8パーセント、半径1キロメートルでも90パーセントです。」とおっしゃったことにも衝撃を受けました。6年生は、平和学習をしています。11月には、修学旅行で現地も訪れます。今回お聴きしたお話を、実際に広島に行くことで、改めて現実のこととして、捉えることになります。

